

羽間文庫の高橋至時関係資料

井上 智 勝

〈大阪歴史博物館 〒540-0008 大阪市中央区大手前 4-1-32〉

現在、大阪歴史博物館に所蔵される羽間文庫には、多く高橋至時の「自筆」本が蔵されていることが知られている。しかしそれを自筆とすることには異論もあり、資料の来歴も含めて検討していくことが重要である。本稿では、このような立場から、羽間文庫とそこに所蔵される高橋至時関係資料を紹介することで、至時研究の資料的基礎についての議論の深化を期すものである。

はじめに

『ラランデ暦書管見』をはじめとする高橋至時の著作については、すでに中山 茂¹⁾、上原久²⁾、渡辺敏夫³⁾らによって、詳細な研究が示されてきた。ただ、それらの書誌的研究には、まだ検討の余地が残されている部分もある。本稿では、羽間文庫に蔵される高橋至時の著作を素材としてこの問題を検討し、科学史研究と人文科学の協業の場を提示できればと考える。

羽間文庫資料は、平成8-11年度にかけて文庫の主であった羽間平三郎氏の令息平安氏から大阪市へ寄贈され、大阪市立博物館を経て平成13年大阪歴史博物館の所蔵に帰するところとなった。私は、当該文庫資料が大阪市に寄贈され、大阪市立博物館に入った際の受け入れ作業から現在までその整理と管理に携わり、その資料をテーマとした2度の展覧会の担当も務めた。専門は、人文系の歴史学、日本近世史である。

1. 高橋至時関係資料の善本と羽間文庫

歴史研究、もちろん科学史研究においても、叙述は信頼できる1次資料を根拠になされるべきだということは、ここに贅言を要するまでもない。具体的には、後世の写しや、何らかの脚色がなさ

れたものではない、作者の自筆の稿本やそれに近い写本が研究の基準に置かれるべきである。

このような視点から、高橋至時の著作について見るために作成したのが表1である。これは『国書総目録』から至時の著作を抽出して作成したものである。最善を期すには、渡辺敏夫の『近世日本天文学史』(下)に収録された「渋川・高橋両家の著書及び蔵書目録と所在」(pp. 873-900)による補訂が必要であろうが、今回は及ばなかった。ただ、『国書総目録』によっても、至時の著作についての一定の傾向を把握することは可能であると考えられる。

表1からは至時の著作に刊行されたものではなく、すべてが墨書の、自筆の稿本も含んだ、広い意味での写本であることが理解される。写本では、書写されていく過程で脱漏が生じることはもちろん、書写する人物によって、ある内容が不要として意図的に削除されたり、逆に加えられる場合がある。したがって、研究にはなおさら著者のオリジナルに近い善本が確定され、使用されねばならない。

至時研究の善本を求める場合、大阪歴史博物館が所蔵する羽間文庫は、少なからぬ注目をひくはずである。表1を見れば、『国書総目録』では羽間文庫所蔵本のほとんどが「自筆」ないし「自筆稿本」となっていることが明瞭であるからである。

表1 高橋至時の著作

| 書名(成立年) | 著者 | 冊数 | 所蔵 | 別 |
|-------------------|--------------|-------|-------------------|---|
| 寛政暦法 | 高橋至時 | 1冊・2冊 | 伊能家 | 写 |
| 月南中法(寛政10年) | 高橋至時 | 1冊 | 伊能家 | 写 |
| 消長法及用数 | 高橋至時 | 1冊 | 伊能家他 | 写 |
| 新修五星法及図説 | 高橋至時 | 2冊 | 伊能家 | 写 |
| 推食法(享和元年) | 麻田剛立著, 高橋至時校 | 1冊 | 伊能家 | 写 |
| 推日食法(享和2年) | 高橋至時 | 1冊 | 伊能家他 | 写 |
| 地球楕円形赤道日食法(享和3年) | 高橋至時 | 1冊 | 伊能家 | 写 |
| 梅軒雜録 | 高橋至時 | 1冊 | 大阪市立図書館 | 写 |
| 西洋新法曆書 | 高橋至時・間重富・観巢訳 | — | 大阪名家著述目録による | — |
| 西曆管見 | 高橋至時 | — | 大阪名家著述目録による | — |
| 東岡曆説 | 高橋至時 | 30巻 | 大阪名家著述目録による | — |
| 曆算雜録 | 高橋至時 | — | 大阪名家著述目録による | — |
| 推食赤道法 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院 | 写 |
| 高橋至時・景保・間重富及其他書簡集 | 高橋至時・景保・間重富等 | 1冊 | 学士院 | 写 |
| 用太陰前後三日実行推本日本時經度法 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院 | 写 |
| 新修五星法 | 高橋至時, 高橋景保等校 | 1冊 | 学士院・東大天文 | 写 |
| 授時曆日食法論解(享和2年) | 高橋至時 | 1冊 | 学士院・伊能家 | 写 |
| 推月食分密法 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院・伊能家 | 写 |
| 推日食地球上見食地方位等 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院・伊能家 | 写 |
| 高橋子春東岡先生日記 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院他 | 写 |
| 白道日食法起源 | 高橋至時 | 合1冊 | 学士院・伊能家 | 写 |
| 星学手簡 | 高橋至時・間重富 | 3冊 | 学士院・東大天文・東北大・羽間文庫 | 写 |
| 寛政七年以後凌犯実測記 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院・東北大他 | 写 |
| 諳厄利亜曆考(享和元年) | 高橋至時等 | 1冊 | 学士院・東北大林文庫 | 写 |
| 列子術(天明元年・6年) | 松岡能一改術・高橋至時考 | 1冊・2冊 | 学士院・東北大狩野文庫 | 写 |
| 気朔簡法 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院・東北大狩野文庫他 | 写 |
| 消長法 | 高橋至時 | 1冊 | 学士院・東北大狩野文庫他 | 写 |
| 列子図解(天明6年) | 高橋至時 | 1冊 | 学士院・東北大狩野文庫 | 写 |
| 正弧三角形八線鉤股比例方 | 高橋至時 | 1冊 | 国会 | 写 |
| 新考日食三法(寛政10年) | 高橋至時 | 3冊 | 国会・学士院・東北大 | 写 |
| 気朔交食推法 | 高橋至時 | 1冊 | 東北大 | 写 |
| 推月南中時刻法 | 高橋至時 | 1冊 | 東北大 | 写 |
| 算法洛書列子術 | 高橋至時 | 2冊 | 東北大・大阪府立図書館 | 写 |
| 海中舟道考 | 高橋至時訳, 渋川景佑校 | 1冊 | 東北大狩野文庫 | 写 |

表1 つづき

| 書名(成立年) | 著者 | 冊数 | 所蔵 | 別 |
|--------------------------------|-------------------------|--------|-------------------------|---|
| 天学秘決集 | 高橋至時 | 2冊 | 東北大狩野文庫 | 写 |
| 刪補授時曆交食法(寛政2年序) | 高橋至時 | 1冊 | 東北大狩野文庫他 | 写 |
| 循環通書 | 高橋至時 | 1冊 | 東北大狩野文庫(原本) | 写 |
| 町見図(天明元年) | 高橋至時 | 1軸 | 内閣文庫(自筆) | 写 |
| 続新巧曆書 | 高橋至時記, 渋川景佑編, 足立信頭他校 | 2冊・20冊 | 内閣文庫・学士院・東北大狩 野文庫 | 写 |
| 曆法新書 | 吉田秀升・山路徳風・高橋 至時等編 | 8冊 | 内閣文庫・国会・東大天文 | 写 |
| 享和二年壬戌二月十六日望食実測 | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆) | 写 |
| 西洋人ラランデ曆書表用法解(享和3年) | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆) | 写 |
| 太陽五星古今諸曆家実測 | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本) | 写 |
| 文昭院様十七ヶ条(享和3年) | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆) | 写 |
| 求地体楕円形南北一度之里数密法 | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本) | 写 |
| 月小時実行表外六稿(享和3年) | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本) | 写 |
| 恒星自行変差 | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本) | 写 |
| 推享和二年壬戌日月食西人「ラランデ」 曆法(享和3年) | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本) | 写 |
| 平朔日時分 | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本) | 写 |
| 推和蘭国曆日法(文化4年) | 高橋至時・間重富 | 1冊 | 羽間文庫(自筆) | 写 |
| 郭守敬筒儀図卷(享和2年) | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆) | 写 |
| ラランデ曆法歩数 | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本) | 写 |
| 赤道日食法(寛政10年・享和2年補) | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆稿本)・学士 院・伊能家他 | 写 |
| 赤道日食法不用月地高度説(享和2年) | 高橋至時 | 1冊 | 羽間文庫(自筆)・学士院・伊 能家 | 写 |
| ラランデ曆書管見(享和3年) | 高橋至時 | 8冊 | 羽間文庫(自筆稿本)・学士 院・伊能家 | 写 |
| 新考交食法(享和2年) | 高橋至時 | 2冊 | 羽間文庫(別名), 学士院他 | 写 |
| 月景日食法 | 麻田剛立撰, 高橋至時補 | 1冊 | 尊経閣文庫 | 写 |
| 算法変形草 | 高橋至時 | 1冊 | 宮城養賢堂 | 写 |
| 精覈算法 | 高橋至時 | 1冊 | 宮城養賢堂 | 写 |
| 消長法捷徑 | 高橋至時 | 1冊 | 礪川 | 写 |

『国書総目録』より。排列は同一の所蔵先が把握しやすいようにした。

これを見る限り、まさに羽間文庫資料は、至時研究の起点となる資料群であるといえる。

しかし、これには反論もある。たとえば、著名

な『ラランデ曆書管見』について、上原久はその著『高橋景保の研究』において『ラランデ曆書管見』には羽間本と伊能本があり、羽間本のほう

がよりオリジナルに近いことを指摘したうえで、「羽間本には各冊ともに「間五郎兵衛蔵書之印記」という蔵書印が押されてあって、これが本来重富蔵本としての写本であることを示している。従って至時自筆の稿本の類は存在しないという他はないのが現状である」(p. 185)と述べている。羽間文庫に所蔵される『ラランデ暦書管見』は、「間五郎兵衛蔵書之印記」印をもつゆえに至時の自筆ではないと判断するのである。この「間五郎兵衛蔵書之印記」印は、「自筆稿本」とされる羽間文庫の至時関係資料に多く押される印である。上原説を敷衍すれば、羽間文庫の至時関係資料は多く「自筆稿本」ではないことになる。

2. 羽間文庫の天文・暦学資料の来歴

確かに、羽間文庫の至時関係資料の来歴は、伊能忠敬記念館に所蔵される伊能家伝来の資料などに比較すれば、やや明確さを欠く。間重富の家は後に断絶し、その所蔵していた書籍や資料は散逸を余儀なくされたと考えられるからである。それらは現在、大阪歴史博物館(羽間文庫資料)、大阪市立中央図書館などに収蔵されるが、いずれもいったん間家を離れた後に収集されたものである。

羽間文庫の資料は、重富の家の蔵書や資料がそのまま継承されたものではなく、大阪海老江の名望家羽間平三郎氏が収集したものであることは、上原が『高橋景保の研究』において指摘するところである。すなわち、上原は羽間平三郎氏未亡人の言に基づき「羽間家に現存する「暦書管見(ラランデ暦書管見, 筆者註)」は、重富から代々伝えられて、現在の羽間文庫に引き継がれて来たものと一般には考えられている。事實は先代の平三郎氏が、大正末期に伊勢から出た古書一車をまとめて購入した中に、偶然入っていたものである」(pp. 181-182)と述べている。上原に従うなら『ラランデ暦書管見』を含む多数の重富旧蔵書は、伊勢に移り、さらに羽間氏によって収集されたとい

うことになる。

羽間文庫には、伊勢山田の飛鳥喜内の書写・所持していた『天徑或問』写本や天明3(1783)年飛鳥正備が写した『宝暦四年甲戌気朔暦凡例』があり、また「飛鳥図書」という蔵書印が押された多くの書籍や推歩草稿が存在する。山田には暦師の飛鳥氏が居たから、これらの資料を伊勢において所持したのは暦師の飛鳥氏であった可能性が高い。飛鳥氏が間重富の関係資料を入手し、さらに重富関係資料を含んだ飛鳥氏の蔵書を入手したので、羽間文庫の中心部分と考えられるのである。

また、羽間文庫には、天文暦学家関係の書状や文書を中心に「石橋教授割愛本」印が押された資料が多くある。これは、第三高等学校教授を勤めた石橋栄達から、羽間氏のもとに入ったものである。これらには、青い罫線が引かれたラベルに「石」という字がスタンプで押されたものが貼られ、整理が試みられた形跡を残している。

以上のことから、羽間文庫の天文暦学資料は、おおむね伊勢の飛鳥氏旧蔵書と石橋栄達所蔵資料を主軸とするものと理解してよいであろう。

また、羽間平三郎氏によって、装丁の改変や、編集・補訂などが行われている資料が多く、原装をとどめていないものも少なくない。たとえば、内容についての目次や、識者のコメントを、原資料とともに綴じ込んでいるような例を挙げることができる。

3. 羽間文庫の高橋至時関係資料

大阪市立博物館、つづいて歴史博物館に収蔵されることとなった羽間文庫資料の中の、至時関係資料を一覧にしたのが表2である。「国書」欄の「○」は表1にあるものを示す。

一見して、表1と対応する件数が少ないことが了解されよう。これは、博物館に収蔵される以前に散逸した可能性があるものもあるが、表題の取り方に起因するところが大きい。たとえば「歴史」部門の11069番に「ラランデ暦書翻訳稿本」11冊

表2 大阪歴史博物館羽間文庫所蔵高橋至時関係資料

| 書名 | 数量 | 単位 | 部門 | 番号 | 国書 |
|--|----|----|----|-------|----|
| 月食観測記録 寛政7年6月17日 高橋至時・間重富 | 1 | 巻 | 歴史 | 11008 | |
| 推和蘭国暦日法 高橋至時・間重富 羽間平三郎氏編集カ | 1 | 冊 | 歴史 | 11033 | ○ |
| 暦引校本 間重富・高橋至時 | 3 | 冊 | 歴史 | 11042 | |
| ラランデ暦書管見・ラランデ暦書表用法解 高橋至時 | 9 | 冊 | 歴史 | 11068 | ○ |
| ラランデ暦書翻訳稿本 高橋至時他 | 11 | 冊 | 歴史 | 11069 | |
| 月食観測記録 享和2年2月16日 高橋至時 | 1 | 冊 | 歴史 | 11087 | |
| 天文方覚（御用測量申付に付）吉田秀升・山路徳風・高橋至時 寛政10年間重富宛 | 1 | 通 | 歴史 | 11090 | |
| 高橋至時書簡 間重富宛 | 1 | 巻 | 歴史 | 11099 | |
| 求地体楕円形南北一度之里数密法 | 1 | 冊 | 歴史 | 11706 | ○ |
| 文照院様十七箇条 高橋至時 | 1 | 冊 | 歴史 | 11708 | ○ |
| 東都表測恒星方中地高度 享和2年 高橋至時 | 1 | 冊 | 歴史 | 11729 | |
| 暦算雑録 二十二 高橋至時 享和元-2年 | 1 | 冊 | 歴史 | 11743 | |
| 赤道日食法 高橋至時 寛政9-10年 | 1 | 冊 | 歴史 | 11753 | ○ |
| 壬戌改正赤道日食法 高橋至時 享和2年 | 1 | 冊 | 歴史 | 11754 | |
| 新考交食術図説 高橋至時（『国書総目録』では「新考交食法」） | 1 | 冊 | 歴史 | 11756 | ○ |
| 眼鏡図説 題箋に「高橋作左衛門至時自筆稿」とあり | 1 | 冊 | 歴史 | 11863 | |

というのがある。これが現在の博物館での登録名称であるが、担当者としては強く改善の必要を感じている。これは当面、受け入れのために作成したリストの名称をそのまま用いているものであるからである。現在、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」（通称：江戸のモノづくり）の一環として、羽間文庫資料に対するより正確な目録の作成に取り組んでいるが、そこにおいては1件ずつ名称を採録した目録を作成したいと考えている。なお、本稿も同研究の成果の一部である。

「ラランデ暦書翻訳稿本」11冊の内訳を、以下、便宜的に番号を付して示す。

1. 題箋「^(ラ)ラランデ暦書七曜用数」（「間五郎兵衛蔵書之印記」印）
2. 題箋「赤道日食法不用月地高度説」（「間五

郎兵衛蔵書之印記」印） 内容：赤道日食法不用月地高度説/白道日食法起源/地球楕円形赤道日食法

3. 題箋「西洋人ラランデ暦書 太陽五星古今諸名家実測」（「梅軒」印）
4. 題箋「太陽五星古今諸名家実測」（「間五郎兵衛蔵書之印記」印）
5. 題箋「ラランデ暦法歩数」（「間五郎兵衛蔵書之印記」印）
6. 題箋「西洋人刺羅迭暦書翻訳 原書第三冊二六七六章，自二七四七章至二七八一章」（「間五郎兵衛蔵書之印記」印） 内容：恒星自行変差/地形楕円象説之内
7. 題箋「推享和二年壬戌日月食 西人ラランデ暦法」（「間五郎兵衛蔵書之印記」印）
8. 題箋「西洋人刺羅迭暦書翻訳 原書第一冊九八〇章・第三冊二七九〇章以下」（「間五郎

兵衛蔵書之印記」印) 内容：平朔日時分/簡平儀図法日食昼黄赤二経交角法/求五星一日黄道实行法

9. 題箋「西洋人刺羅迭曆書翻訳 原書第二冊第三冊中管見に洩れたるを拾緝」(「間五郎兵衛蔵書之印記」印) 内容：月小時実行表/求月経視差法/本星表 ABCDE 五平均略説/求木星 ABCDE 引数根法/木星 ABCDE 五種平均表数考/木星四小星表略説/木星四小星表数大略/恒星表略説/清蒙気差表

10. 題箋「西洋人刺羅迭曆書管見七類稿 原書第三冊 自二七〇一章至二七四六章」(石橋栄達割愛本) 内容：赤道退行/黄赤大距古大今小説/論黄赤大距漸減差及恒星黄道経緯度変差之理

11. 題箋「新巧曆書厄日多国星学原 自二百八十三章至三百八章訳草 馬場貞由」(「間五郎兵衛蔵書之印記」印) ※文化9年序, 高橋景保閲校

附. 題箋「ラランデ曆書翻訳稿本 綜合目録 高橋至時 間重富」※羽間平三郎編

通覧すれば、表1と対応するものが多いことに気づくであろう。確かに題箋の記載とは相違するが、題箋に「西洋人刺羅迭曆書翻訳 原書第三冊二六七六章、自二七四七章至二七八一章」とある6は、「恒星自行変差」と「地形楕円象説之内」という二つの要素から構成されているので、表1の「恒星自行変差」に比定することができる。また題箋に「西洋人刺羅迭曆書翻訳 原書第一冊九八〇章・第三冊二七九〇章以下」とある8は、内容に「平朔日時分」を含むから「平朔日時分」に合致する。題箋に「西洋人刺羅迭曆書翻訳 原書第二冊第三冊中管見に洩れたるを拾緝」とある9は、内容に「月小時実行表」以下を含むため、「月小時実行表外六稿」に相当するだろう。ただ、「郭守敬簡儀図鑑」は相当しそうなものがない。

それはともかく、この「ラランデ曆書翻訳稿本」として一括される11冊は、『国書総目録』では

「自筆稿本」とされている。しかし一方で「間五郎兵衛蔵書之印記」印をもっている。上原に従えば、ここでも矛盾が生じ、羽間文庫の高橋至時関係資料は、そのほとんどが「自筆」「自筆稿本」ではないことになってしまう。

しかし、重富蔵書印が押されていても、至時の自筆と考えられる資料もある。たとえば、『推和蘭国暦日』は、前半を高橋至時が、後半を間重富が執筆しているが、冒頭至時筆とされるころには重富の印があり、その部分の筆跡は明らかに後半の重富の筆跡とは相違している。重富蔵書印が押された資料が、必ずしも重富書写本とは限らないのである。

おわりに

かつてこれらの諸本を所蔵し、通曉したはずの羽間平三郎氏も、筆跡の判断には迷うところがあったようである。例えば、羽間文庫には『国書総目録』にいう「太陽五星古今諸曆家実測」が2本蔵されている。歴史11069の3・4である。これはともに異筆であり、1本には「間五郎兵衛蔵書之印記」印が、1本には「梅軒」と判読できる印が押されている。羽間氏は、歴史11069に付した「ラランデ曆書翻訳稿本 綜合目録 高橋至時間重富」において、両書を比較して「梅軒朱印ハ至時の原稿本、後者(間印記本、筆者註)ハ其写本ニテ至時自ラ手シテ、之ヲ重富ニ贈リ其批評を求めたるものなるべし」と述べている。ともに至時の筆とする見解である。しかし、刊行された『羽間文庫目録』第1集⁴⁾(以後、続刊せず)においては次のような見解を示している。双方ともに本文28丁に「本書墨薄ク甚見難シ」という記載のあるところから、かたや至時、かたや重富の蔵書であることは認めながらも、どちらも原本ではないと判断するのである(pp. 170-171)。私自身も判断をつけかねるところであるが、とりあえず「梅軒」の落款には注目してみる必要を感じる。至時の落款はそれほど多く知られないが、至時研究

の基礎としての善本判定のためには、このようなものをできる限り集めていく作業が不可欠である。

また、筆跡の校合も重要な作業になってくるだろう。筆跡の中で本人確定がしやすいものには、書状や観測記録があり、羽間文庫にもこれらが存在するが、清書のとときは書き方が大きく異なる点で注意が必要である。また、写本の場合は必ずしも本人が書写しているとは限らないところにも難しさがある。

ともあれ、このような地道な作業の積み上げの先に、科学史研究と人文科学が共同して成果を作り上げられる場があることは確信してよいであろう。

参考文献

- 1) 中山 茂, 1972, 「高橋至時と「ラランデ暦書管見」」(『日本思想大系 洋学』下), 岩波書店
- 2) 上原 久, 1977, 『高橋景保の研究』, 講談社
- 3) 渡辺敏夫, 1986-87, 『近世日本天文学史』(上)(下), 恒星社厚生閣
- 4) 『羽間文庫図書目録』第1巻, 1970, 羽間文庫

Historical Sources about Takahashi Yoshitoki Owned by the Hazama Library Tomokatsu INOUE

Osaka Museum of History, 4-1-32, Ohtemae, Chuo-ku, Osaka 540-0008, Japan

Abstract: In this report, I overview the books and archival documents relating to the Shogunal astronomer Takahashi Yoshitoki, which are now preserved at the Osaka Museum of History as the Hazama collection. Although overall authenticity of this collection is doubtless, I also point out the importance of further pursuing bibliographic studies of the materials on a book-by-book basis, since they had not originally been owned by the Hazama family but recollected at a later time.